

愛他性に関する国際比較研究^{1) 2)}

——米国, 中国, 韓国, トルコ, 日本の中学生・高校生を対象として——

松 井 洋

A Cross-cultural Study of Altruism among the Youths in Five Countries

Hiroshi MATSUI

キーワード：愛他性, 国際比較研究

愛他性は、簡単にいえば、他の人のために何かをしようとする傾向である。しかし、きちんと定義しようとする、研究者によって少しずつニュアンスが異なる。例えば、Eisnberg & Mussen(1989)は「他人のためになることをしようとする内発的に動機づけられた自発的な行為」と定義し、Staub(1978)は外的な報酬を期待しない行為という動機的側面を重視して、いわゆる向社会的行動一般と愛他行動とを区別しており、また、自己犠牲を伴うことを覚悟して行うということも条件に入れている。このように愛他性もしくは愛他行動の定義には多少の違いがあるようである。これらの複数の定義を基にして、愛他性の必要条件を考えてみると、他者のために何かをしようとする傾向ということと、そのために、時には多少なりとも自己犠牲をはらうということである。そこで、本論文では、「愛他性とは、その程度はともかく、自己犠牲をはらっても他者のためになることをしようとする態度」であると定義して議論を進め

1) 本論文は、下記のメンバーによって行われた研究プロジェクトの成果の一部について分析したものである。

島田一男(川村学園女子大学), 中里至正(東洋大学), 加藤義明(東京都立大学), 瀬尾直久, 石井隆之(日本・精神技術研究所)。

また、外国の調査では以下の方々の協力を得た。Roger V. Burton(ニューヨーク州立大学バッファロー校), LeRoy Anderson(モンタナ大学), Kay Ray Chong(創価大学), 近藤幸子(チャナッカレ大学), 李元錫(東国大学), 畢 曉白(北京師範大学)

2) 本研究プロジェクトは以下の研究補助を得て行われた。平成6年度私学振興財団学術研究振興資金, (研究代表者：島田一男), 学校法人川村学園。

る。

今日、愛他性の問題が盛んに研究されている理由は、現代社会が抱える諸問題の原因や解決法を考えるとときに、愛他性の欠如がその基底にあると考えたほうがよいことがよくあるからである。例えば、近年のわが国の犯罪や非行には、他者の被害を省みない残酷、冷酷な犯行が目立つ。このような犯行の原因を考えるとときに、そのような行為をするような攻撃性や衝動性などの、人のネガティブな側面が強すぎると考えるだけではなく、そのような行為を止める愛他性や思いやりや共感性というような、人のポジティブな側面が弱いのではないかと考えたほうが、問題の本質をより正しく説明しているのではないだろうか。このようなことは「いじめ」の問題を考えるとときに特にあてはまるであろう。「いじめ」を苦にして中学生などが自殺してしまうという痛ましい事例がよくあるが、このようなときに加害者たちの多くは自分の行為をそれほど重大なことではなかったと考えていることが多い。実際、「いじめ」の加害者たちの行為は多くの場合「ささいな」攻撃である。しかし、その「ささいな」行為は被害者を深く傷つけている。これは、自分の行為について自分本位にしかみておらず、他者にどのような影響があるか、他者はどう感じているのかという観点に欠けているということである。だから、「いじめ」の問題は攻撃性の問題と言うより、他者の苦痛や気持ちへの配慮、共感、思いやりなどのポジティブな側面の弱さの問題といったほうが良い。

加えて、「いじめ」の問題で顕著なのは加害者、被害者のどちらにも入らない周辺の人々の問題である。彼等自身は「いじめ」をしていないわけではあるが、いじめられている人を助けられないことが多く、そのため、被害者は逃げ場がなく、追い詰められていく。このような、「いじめ」の周辺にいる人々は、自分が加害行為をしないという点で自分は「悪くない」と考えているようであるが、困っている被害者を積極的に助けなかったという点で「善くない」のである。この「いじめ」における「冷淡な傍観者」は、まさに、1964年にニューヨークで起きた、あのキティ・ジェノヴィーズ事件の傍観者と同じである。この事件はキティが暴漢に襲われて殺されるまで、38人の人々が目撃していたにもかかわらず、誰も助けず、警察に通報もしなかったというショッキングな事件であった。そして、このような出来事は、積極的に「悪い」ことをしないことは、「善い」人間であることの十分条件ではないことをわれわれに鋭く突きつけている。また、よりよい社会を造るためには、人の「悪い」面を押さえ込むだけではなく、人の「善い」面を伸ばしていく必要があるということの人々に知らしめ、ラタネ & ダーリー(1977)や Mussen & Eisenberg-Berg(1977)などをはじめとする、人の愛他性にかかわるような研究を喚起した。

このように、現代社会における問題を考えるときには、人のネガティブな点だけでなく、ポ

ジティブな面の低下、欠如という問題であるという観点が必要であり、愛他性はその中心的テーマであると考えられる。

著者らの研究グループは、愛他性についてこれまで国際比較研究を続けてきており(中里他 1990, Nakasato & Matstui 1993), 1993年からは、日本、米国、中国、韓国、トルコの中学生・高校生を対象に調査を行った。我々が、愛他性の問題を国際比較によって研究することが重要だと考えている理由は、愛他性の強さや性質が、文化によってかなり異なるからである。

愛他性の文化差について、例えば、Whiting & Whiting(1975)は6つの異なる文化の子どもを比較している。彼等はケニア、メキシコ、フィリピンの子どもは、沖縄、アメリカ、インドの子どもに比べてより愛他的であると述べている。そして、われわれのこれまでの研究でも、愛他性の強さは国によって異なるということを示す結果を得ている。他方、愛他性の文化差については、強い、弱いの量的な側面以外にも、質的側面についても文化差があると考えられる。例えば、我々の以前の研究でも、米国の青少年は緊急時には愛他的だが、物を分与するようなことはあまりしないというようなバラツキがあることがわかっている(中里他 1990, Nakasato & Matsui 1993, Nakasato & Matsui 1996)。そして、今回われわれが行った研究ではこのようなバラツキを基に分析を行い、愛他性の構造が国によって異なることを示す試みを行っている(松井他 1995, Nakasato & Matsui 1996)。また、愛他性の質的側面の文化差については、他にも愛他行動をすることの理由、すなわち動機の問題がある。この点について、Eisenberg & Mussen(1989)は、アメリカの都会の子どもよりイスラエルのキブツの子どものほうが、より内面化された道徳的推論をすると文化差について述べている。以上のように愛他性の量的側面、構造、動機については文化差があると思われる。これらの文化差の問題のうち愛他性の強さ、動機については、われわれも前述のように検討をしており、別の論文で分析する。

本論文では、愛他性の文化差の問題のうち、まず、愛他行動をする相手が知人であるか他人であるかという、対象の違いによって愛他性の強さが違うのかということについて検討する。愛他性の強さには状況によるバラツキがあり(松井他 1984, 1985, 1986), 前述のように、この点についての文化差もあるようである。ここでいう状況は、行うべき愛他行動の種類や、愛他行動をする相手の違いによって構造化されるが、その構造のうち相手が知人か他人かという軸は重要な構造軸である可能性がある。人が誰のために行動しているのかといえ、簡単にいえば、それはまず自分のためであり、次いで自分の子ども、さらには他の血縁者、知人、そして、最後に全く見ず知らずの無関係の他人という、自己から他者という方向・順であろう。そして、最後に近いほうが「他者のためになにかをする」という愛他性の要件をより十分に満た

しているだろう。もし、他人に対しても知人と同じように愛他的であるなら、自己犠牲の程度や愛他行動をする頻度等の愛他性の強さを示す指標とは別に、愛他性が強いことを示しているといえ、愛他性を考える場合の重要な側面といえるだろう。そこで、本研究ではこの愛他行動の対象が知人か他人かと言うことによる愛他性の違いについて、調査対象の5カ国の中学・高校生について比較を行う。

また、愛他行動をする相手が知人か他人かということによる愛他性の違いは、発達の観点からどの様に変化するものなのであろうか。愛他性の発達の違いの問題について、Eisenberg & Mussen(1989)は、愛他行動の性質の違い等によって一概にいえないとしつつも、愛他性(向社会的行動)の強さは一般的に年齢とともに増加するとしている。しかし、松井(1991)は、日本の高校生と大学生とを比べて、愛他性は大学生のほうが強いとはいえないという結果を得ている。このように、愛他性の強さの発達については年齢とともに強くなるとは一概にはいえないうようであり、また、文化差があるとも考えられる。同様に、愛他性の質的側面の発達についても文化差が考えられ、この点について Eisenberg(1986)は、愛他性の認知的側面として向社会的な道徳的推論をあげており、この推論には、快樂主義的・自己焦点的指向の水準からはじまり、強く内面化された水準に進む、年齢と結びついた5つの段階があるとし、文化差があるとしている。このように見ていくと、前述の愛他行動の対象が知人か、他人かという問題については、知人に対する愛他性から他人に対する愛他性へと発達していくとも考えられる。しかし、この点についての報告はまだ行われていないようである。そこで、本研究では愛他行動の対象が知人か他人かということによって愛他性の程度が異なるということについて、年齢比較を5つの国の対象者について行い、やはり文化差について検討する。

加えて、この問題についての男女差についても検討する。愛他性には男女差があると考えられるが、その差について一貫した傾向があるとは認められていないようである。そこで、愛他行動の対象の違いによる愛他性の違いについての男女差について検討してみる。

以上の観点に基づいて、本研究では以下の仮説について検証を行う。

1. 愛他行動の対象が他人であるより、知人である場合のほうが愛他性は強い。
2. 1. の愛他行動の対象によって生じる愛他性の強さの違いは文化によって異なる。すなわち、相手が知人か他人かということで愛他性に大きな違いのある文化と、違いのほとんどない文化がある。
3. 人の愛他性の発達の方向は、知人、他人に対する愛他性の違いが小さくなることである。つまり、年齢とともに相手が知人でも他人でも同じように愛他的に行動するようになる。
4. 愛他性の発達の方向には文化差がある。つまり、愛他性が発達とともに強くなる文化、弱

くなる文化があり、また、知人-他人の違いがなくなる文化と、広がる文化がある。

5. 愛他性やその発達について男女差がある。

本論文の基となる研究では、愛他性を中心に、多様な個人的要因、環境的要因について調査を行っているが、その内容は膨大であり、一論文では検討が困難なので、いくつかの論文で異なるテーマをそれぞれ取り上げることとし、本論文では上記仮説についてのみ検討する。

方 法

1. 調査対象者

調査対象者は Table 1. のように、日本、米国、中国、韓国、トルコの5カ国の中学生 2854 名、高校生 2280 名、合計 5134 名である。

Table 1. 調査対象者 (人)

| | | 日本 | 米国 | 中国 | 韓国 | トルコ | 全体 |
|----|----|------|------|-----|-----|-----|------|
| 中学 | 男子 | 305 | 536 | 217 | 166 | 158 | 1382 |
| | 女子 | 325 | 542 | 238 | 173 | 171 | 1446 |
| | 不明 | 8 | 0 | 1 | 1 | 16 | 26 |
| | 小計 | 635 | 1078 | 456 | 340 | 345 | 2854 |
| 高校 | 男子 | 334 | 290 | 175 | 201 | 131 | 1311 |
| | 女子 | 248 | 299 | 174 | 197 | 190 | 1108 |
| | 不明 | 15 | 4 | 11 | 1 | 10 | 41 |
| | 小計 | 597 | 593 | 360 | 399 | 331 | 2280 |
| 合計 | | 1232 | 1671 | 816 | 739 | 676 | 5134 |

調査場所は、日本は東京と函館、米国はモンタナ州ミズーラとニューヨーク州バッファロー及びその近郊、中国は北京、韓国はソウル、トルコはチャナッカレ及びその近郊である。調査学校は公立で、家庭環境、学力、人種構成がその地域の平均的なものになるように、また、男女の割合が均衡するように配慮した。

2. 調査時期

日本、米国、中国、韓国は1993年9月～11月、トルコは1994年10月に調査を実施した。

3. 調査方法

質問紙調査を各学校の教室において、各国の調査協力者が実施した。

4. 調査内容

愛他性について以下のように、各種の愛他行動が要求される場面を短い物語にして、対象者

に提示した。状況は「援助」（混雑するバスの中で座っている時に、前に老人が立った）、「緊急援助」（学校に行く道で、前を歩く人が倒れた）、「分与」（登山の途中、残り少ない水を分けてほしいと頼まれた）の3種類の愛他行動に関するもので、各々、相手が「知っている人」（知人）の場合と「知らない人」（他人）の場合をそれぞれに設定したので、合計6状況となる。これら6状況について「自分で助ける」から「何もしない」まで、愛他行動をするかどうかを4段階で答えさせた。なお、他にも「寄付」、「奉仕」の状況や、愛他行動をする場合にはなぜするのかその理由についても質問しているが、本論文の内容とは直接は関係がないので結果について述べない。また、愛他性以外にも非行許容性、道德意識や性格要因、環境要因等について合計117項目の質問をしているが、これらの結果については別に報告する予定である。

なお、質問内容の言語による違いを最小にするために、各国の調査協力者によって質問内容についての討論を行い、さらに、翻訳については各国の複数の研究者の校閲を得て調査票を作成した。

結 果

援助、緊急援助、分与の3場面における、知人、他人それぞれに対する愛他性を分析するために、前述の愛他行動をするかどうかの4段階尺度を4点から1点に得点化して、5ヶ国×中学生・高校生×男・女別に平均得点を算出し、愛他性得点とした。この愛他性得点を、相手が知人か他人かという状況を合わせて3場面別にFig. 1.からFig. 3.に示した。各Fig.は、同じ場面での、知人と他人との関係を明らかにするために、知人に対する愛他性得点を横軸に、他人に対する愛他性得点を縦軸にとってある。もし、知人、他人に対する愛他性が同じ程度なら、図を2分する斜線($X = Y$)上に値がプロットされる。また、他人に対する愛他性の方が強い場合には左上に($X < Y$)、知人の方が強い場合には右下に($X > Y$)プロットされ、斜線より遠ざかるほどその傾向が強いことを意味している。中学生と高校生の年齢比較は、中学生→高校生というように、矢印で示してある。言うまでもなく、本研究は縦断的方法ではなく、横断的方法なので、この→の示すものは、発達的変化の事実ではなく、年齢比較によって推定した発達の方向である。

援助場面

援助に関する愛他性を知人と他人で比べると、Fig. 1.のように、全ての国、中高、男女別の値が右下にある。つまり、国、学校、性別などのどの様な属性でも、知人に対する愛他性の方

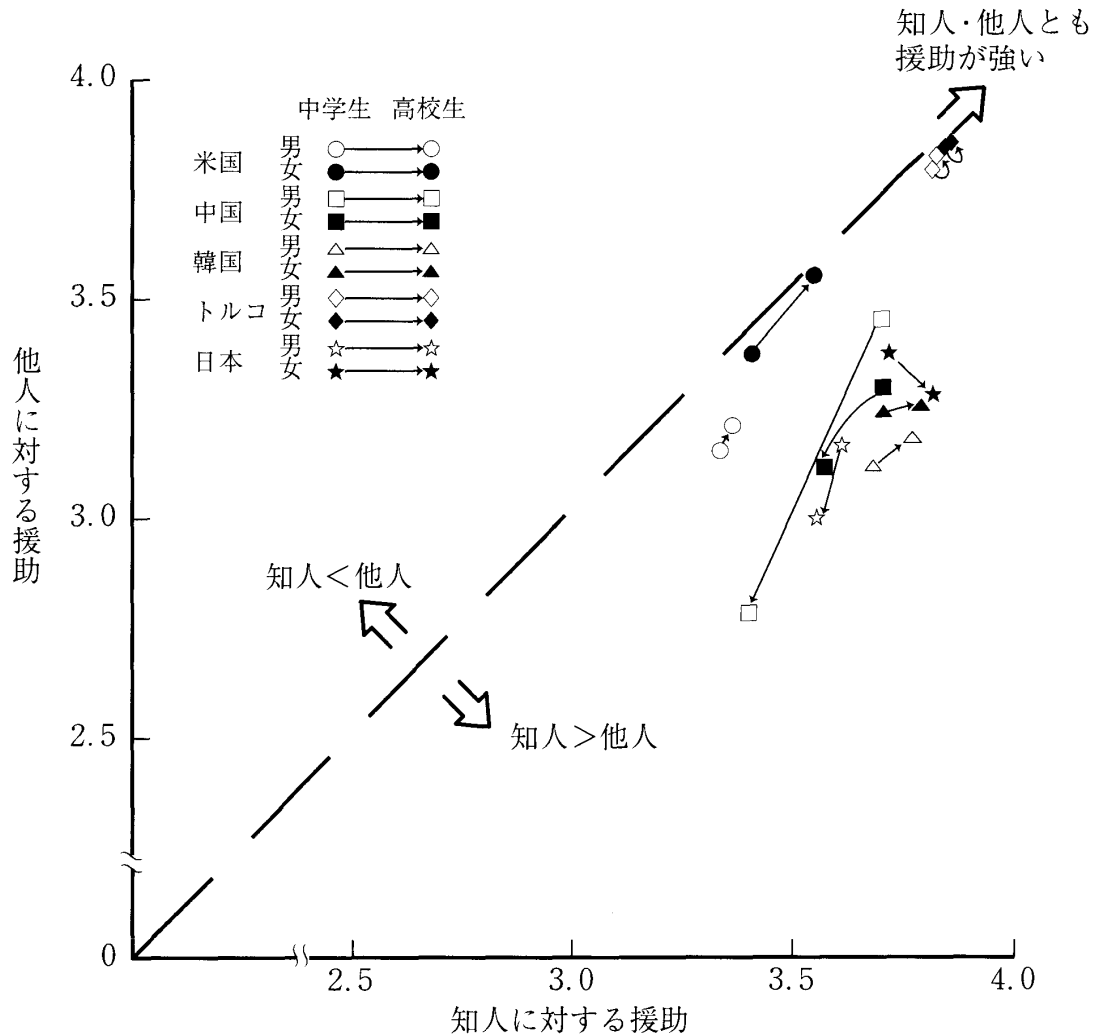


Fig. 1. 知人と他人に対する援助

が他人に対する愛他性より強い。

5カ国別に値を見ると、米国とトルコはほぼ中央の斜線に沿ってプロットされている。すなわち、この2国の対象者は、知人と他人に対する愛他性がほぼ均衡していることを示している。また、トルコは援助に関しては知人、他人とも天井に近いほどの強さを示している。他方、中国、韓国、日本の3国は斜線から右下方向に離れてプロットされている。すなわち、これら3国の対象者は、知人に対する愛他性が他人に対する愛他性よりも強いことを示している。そして、この傾向が最も著しいのは韓国である。

中学生と高校生とを比較すると、中国のように男女とも、中学生より高校生の間で、知人、他人に対する愛他性がどちらも弱くなる場合、米国の女子のように知人、他人に対する愛他性

がどちらも強くなる場合、また、日本の対象者のように男子は他人に対する愛他性が弱くなり、女子は知人他人とも、どちらも差は小さいが弱くなる国がある。さらには、米国の男子、韓国、トルコの対象者のように、中学生と高校生との違いが小さい場合があり、一概には言えない。ここで、もっとも中学生と高校生との違いの著しかったのは中国の男子であり、中学生より高校生の愛他性が弱く、特に、他人に対する愛他性が弱くなっている。

男女差を比較すると、米国、日本、韓国の対象者のように、女子のほうが愛他性が強い国と、トルコ、中国のように差の小さい国がある。トルコは特に男女差、年齢差ともに、違いが極めて小さい国である。

緊急援助場面

緊急援助場面における愛他性についても、援助場面と同様に知人、他人の比較を Fig. 2. に示した。

Fig. 2. のように、緊急援助場面に関する愛他性を知人と他人との間で比べると、援助場面と同様に、全ての国、中高、男女別の値が右下にある。つまり、どのような属性でも知人に対する愛他性の方が他人に対する愛他性より強い。

5カ国の値を見ると、トルコは中央の斜線に近くプロットされており、緊急援助場面での、他人に対する愛他性は知人に対する愛他性に近い。それに対して、他人に対する愛他性が知人に対する愛他性に比べて最も低いのは韓国である。

中学生と高校生とを比較すると、米国、トルコのように知人、他人とも中学生より高校生で愛他性が強くなる国がある。特に、米国は知人、他人とも愛他性が高校生で強くなるので、愛他性が最も強いトルコに近いほど愛他性が強くなる。そして、その強くなる傾向は他人に対する場合により著しいので、知人、他人の違いもまた、高校生では小さくなっており、他人に対する愛他性は知人に対する愛他性に近いレベルになっている。この2国とは反対に、中国ではかなり大きな割合で、知人、他人どちらの相手に対しても高校生の愛他性が中学生より弱くなる。そして、日本の対象者は、他人に対する愛他性については中・高校生の間でほとんど違いがないが、知人に関する愛他性については高校生の愛他性が中学生より強くなる。韓国の対象者も日本と似た傾向がある。以上のように、中学生と高校生との違いは国によって異なる様相を示している。その中で、中学生と高校生との間で、もっとも大きな違いが見られたのは米国と中国であった。しかし、この両者は中学生と高校生との間の変化が全く逆であり、米国は中学生より高校生の愛他性が強く、特に他人に対する愛他性が高校生で強くなる。反対に、中国は愛他性が中学生より高校生で弱く、特に他人に対する愛他性が弱くなるという、完全に対称

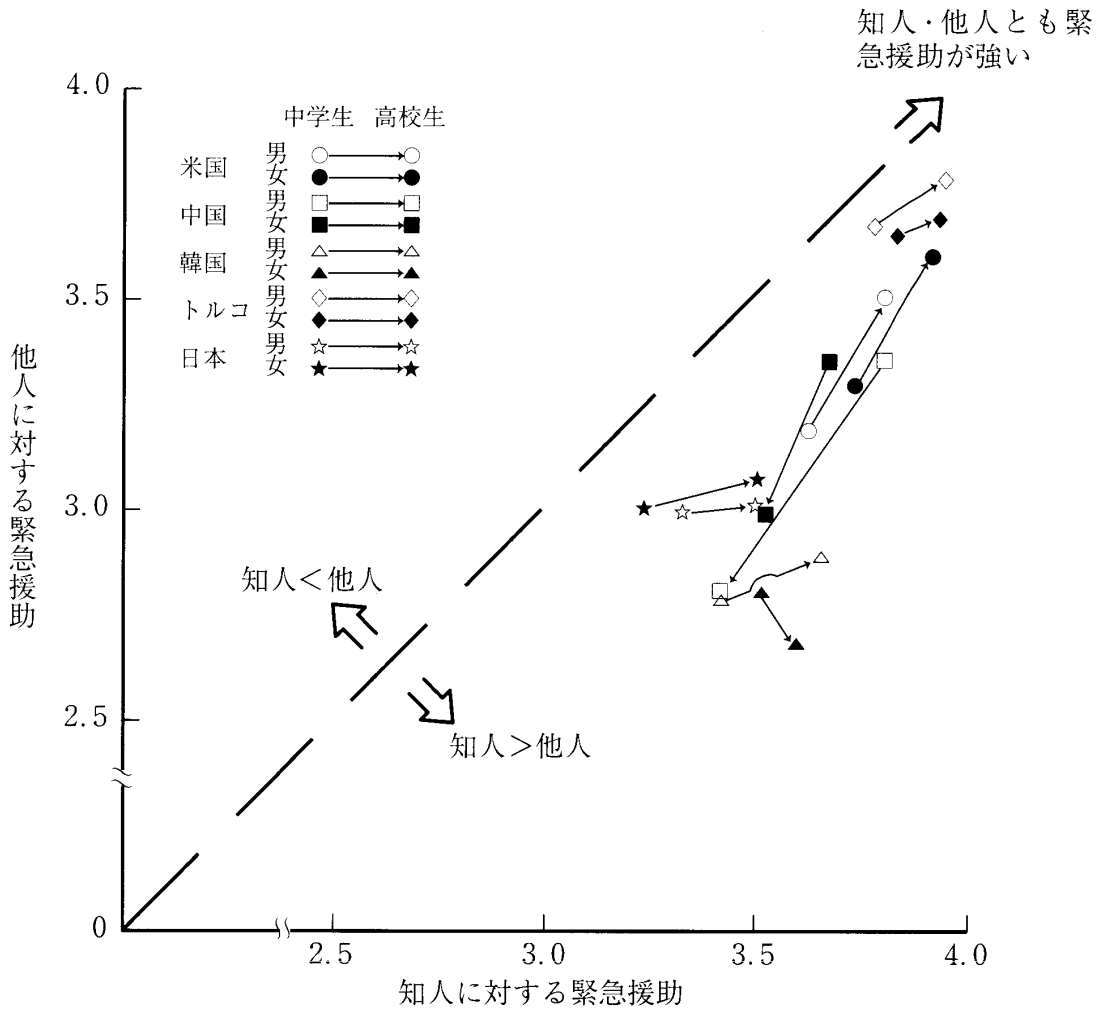


Fig. 2. 知人と他人に対する緊急援助

的な変化が中学生—高校生間に起きているようである。

男女差についてみると、国、年齢差における違いと比べると違いが小さい。すなわち、この緊急援助場面では男女差があまり見られない。

分与場面

分与場面における愛他性についても、前2場面と同様に、知人、他人の比較を Fig. 3.に示した。Fig. 3.のように、分与場面に関する愛他性は援助、緊急援助と比べると相対的に低い。しかし、援助場面、緊急援助場面と同様に、全ての国、中高、男女別の値が右下にある。つまり、どのような属性でも知人に対する愛他性の方が他人に対する愛他性より強い。

5カ国の値を見ると、トルコの値は中央の斜線近くにプロットされており、他人に対する愛

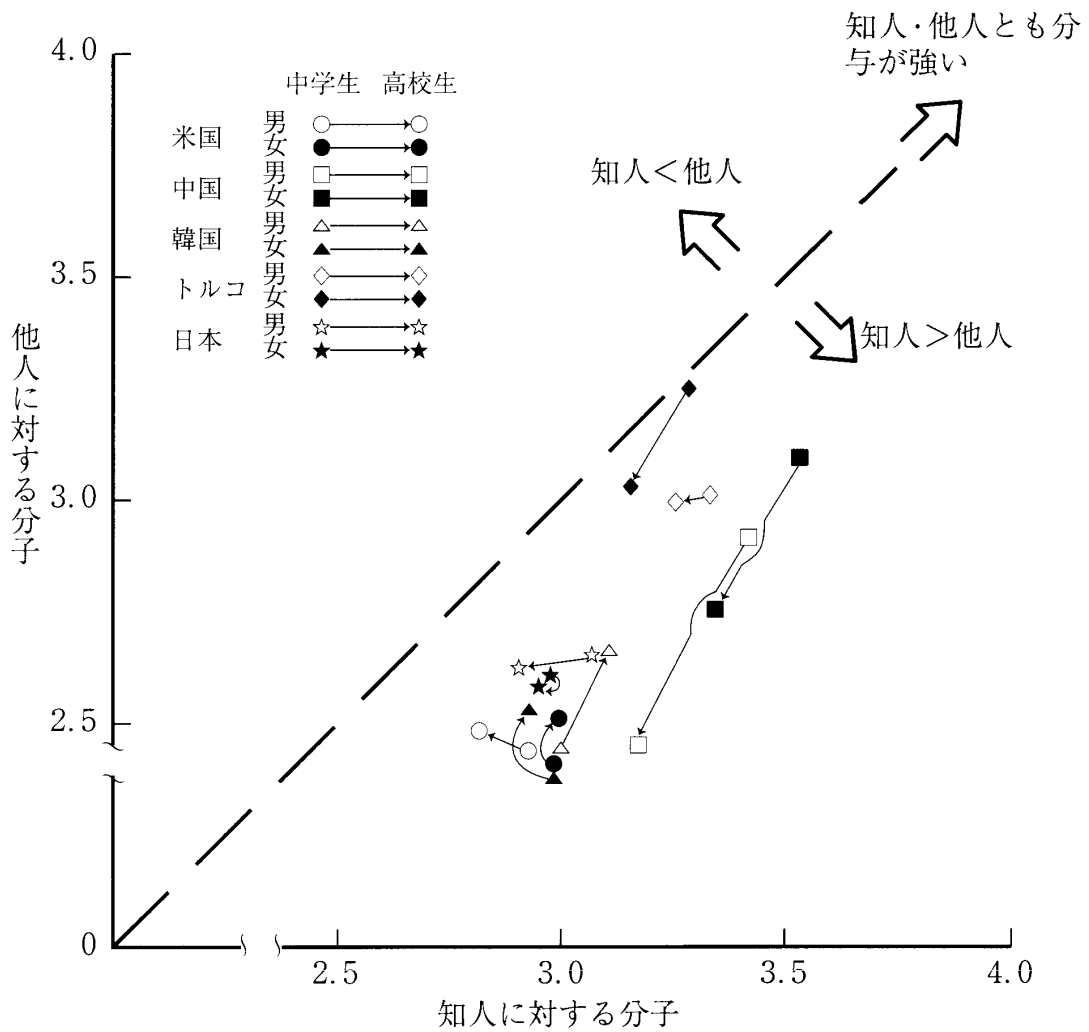


Fig. 3. 知人と他人に対する分与行動

他性は知人に対する愛他性に近い。トルコとは反対に、他人に対する愛他性が知人に対する愛他性に比べて相対的に最も低いのは中国である。

中学生と高校生とを比較すると、最も違いの大きいのは中国であり、男女とも知人、他人に対する愛他性が高校生では大きく低下している。この傾向はトルコの女子にも見られる。これらと反対の傾向は韓国の男子に見られ、知人、他人とも高校生で愛他性が強くなる。分与場面でも、中国の男女の愛他性の、中学生、高校生の間の違いがほかの国の違いより大きく、高校生の愛他性は中学生より低くなり、特に、他者に対する愛他性が低くなっていた。

男女差についてみると、トルコ、中国で知人、他人に対する愛他性が、女子が男子より強い。

考 察

本論文の第一の目的である、愛他行動の対象が知人か他人かという場合の愛他性の強さの比較について、援助場面、緊急援助場面、分与場面とも、常にどのような属性についても知人に対するほうが他人に対するより愛他的であった。それ故、仮説1「愛他行動の対象が他人であるより知人である場合のほうが愛他性は強い。」は支持された。やはり、愛他性は自分により近い対象に対してより強く発揮されると言える。そして、見ず知らずの他人にたいして愛他的であることが「真の愛他性」であるなら、それを実現することはなかなか難しいことだといえるだろう。

しかし、この傾向を5ヵ国別にみると、国によって違う特徴があった。トルコは3場面において知人、他人の違いが極めて小さく、また、米国もトルコに近い傾向があり、この2国は他者に対しても知人に対するように愛他的な態度を持つといえる。それに対して、中国、韓国、日本は知人と他人とのあいだで愛他性の違いが大きく、知人に対しては愛他的だが他人に対しては愛他的ではなかった。このように、どの国の中学・高校生も他人より知人に対して愛他的であるとはいえ、文化によっては他人に対する愛他性が、知人に対する愛他性とほぼ同程度になることがあるということが示された。それ故、仮説「愛他行動の対象によって生じる愛他性の強さの違いは文化によって異なる。」は支持された。トルコ、米国と中国、韓国、日本との違いが生じる要因について考えてみると、後者の傾向が東アジアの特徴である血縁、縁者、身内を大切にする伝統の反映とも解釈できるし、また、イスラム教やキリスト教のような、言わば絶対的価値観の影響が強いトルコ、米国と、そのような価値観が希薄と思われる中国、韓国、日本との違いとも考えられる。これらの解釈は、もちろん推測の域を出ない。しかし、愛他性が知人に対するものと他人に対するものとで違うのか、違わないのかという、愛他性の根本的要因について文化差があることは、愛他性というものが文化によって、それぞれ異なるものであるということを示していると思われる。そして、家庭、学校、教会などの環境や教育によって、他人にも愛他的であるという態度がある程度は達成可能であることを示している。

愛他性の発達についてみると、国により、中学生より高校生の方が愛他的になったりそうでなかったりと違いがある。しかし、大きな発達の方向づけとして、知人に愛他的であったものが年齢とともに、他人にも愛他的になるという傾向は認められなかった。すなわち、仮説「人の愛他性の発達の方向は、知人、他人に対する愛他性の違いが小さくなることである。」は支持されなかった。本研究は、中学生と高校生との比較であるので、小学生の年齢や大学生の年齢との比較を含めて議論しなければ、この仮説の是非についての結論はでないと思われる。な

お、この問題について、松井(1991)の結果によれば、高校生と大学生の間に明らかな差はないので、愛他性は年齢とともに強くなるとは、少なくとも青年期ではいえないのではないだろうか。もしできるならこの問題に関してより年少の対象についての研究が必要と思われる。

中学生と高校生との違いについて、国別の違いについてみると、これが大きかった国は米国と中国であった。そして、この違いは対照的であって、中学生と高校生との間で、米国は愛他性が強くなる方向に、中国は逆に弱くなる方向への変化を示唆していた。つまり、愛他性の発達の方向は文化によって異なることを示唆している。また、この変化において、米国は知人－他人の愛他性の違いが僅かだが小さくなる傾向がみられ、反対に中国は大きくなる傾向がみられた。中国で知人－他人の違いが大きくなったのは、中国の高校生の、特に他人に対する愛他性が中学生より低いことによる。しかし、これらの傾向は顕著なものとはいえなかった。それ故、仮説「愛他性の発達の方向には文化差がある。」は部分的にだが支持されたといえるだろう。しかし、「年齢とともに相手が知人でも他人でも同じように愛他的に行動するようになる」ということについての文化差はある程度支持されたが、確証を得たとはいえない。米国と中国の対照的な変化の原因を考えてみると、米国の場合はやはり、家庭、学校、教会などで、他者を愛することや、ボランティア精神などを教育していることが原因と考えられる。もちろんこれは推定であって、データに基づくものではないが、松井(1991)は、日本の大学生について理性的動機に基づく愛他性は学校教育と関係が深いということを示しているので、ある程度の根拠はあるであろう。他方、中国における米国とは反対の、そして問題のある変化の原因は、伝統的な血縁、身内を大切にす態度なのか、近年急激に起きた経済の開放ということによる利己主義、拝金主義ということなのか、また別の原因か、今のところ根拠のある説明は難しい状態である。

男女差については、男子より女子の方が愛他性が強いという傾向が、いくつかの場面、国で見られた。しかし、この傾向は国による違いや、中学生と高校生との違いに比べると小さいものであった。そして、愛他性の発達の方向については男女差は見られたとはいえなかった。そこで、仮説「愛他性やその発達について男女差がある」は部分的に支持されたが、それは文化や年齢を超えるものではなかったといえる。

以上のように、愛他性の強さ、知人－他人の対称の違いやその発達に関して、かなり大きな文化による違いが認められた。このことは、愛他性というものが、強く文化に依存するものであり、文化によって異なる性質の愛他性が存在するといえるだろう。

引用文献

- Eisenberg, N.: 1986, *Altruistic emotion, cognition and behavior*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Eisenberg, N. & Mussen, P. H. 1989, *The Roots of Prosocial Behavior in Children*. Cambridge University Press. (アイゼンバーグ, N. & マッセン, P. 菊池章夫, 二宮克美(訳), 1991, 『思いやり行動の発達心理』金子書房。
- Hoffman L. Martin: 1976, *Empathy, Raole-taking, Guilt, and Development of Altruistic Motives*. In Lickona, T. (ed.), *Moral Development and Behavior*. Holt, Rinehart and Winston.
- ラタネ, B. & ダーリー, J. (竹村研一, 杉崎和子訳), 1977, 『冷淡な傍観者』ブレン出版。(Latané, B. & Darley, J. 1987, *The unresponsive bystander; Why dosen't he help?* New York; Appteton.)
- 松井 洋: 1991, 『青年期における愛他行動の発達とその規定因』, 川村学園女子大学研究紀要 第2巻 pp. 181 - 193.
- 松井 洋・能見義博・米澤俊治・青木敬一・竹内美香: 1984, 『愛他行動カテゴリーと観察学習の効果その1』 日本心理学会第48回大会発表論文集。
- 松井 洋・能見義博・米澤俊治・青木敬一・竹内美香: 1985, 『愛他行動カテゴリーと観察学習の効果その2』 日本心理学会第49回大会発表論文集。
- 松井 洋・能見義博・米澤俊治・杉山憲司・佐藤千津子: 1986, 『愛他行動カテゴリーと観察学習の効果その3』 日本心理学会第50回大会発表論文集。
- 松井 洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之: 1995, 『愛他性の構造に関する国際比較研究』 日本心理学会第59回大会発表論文集。
- Mussen, P. & Eisenberg-Berg, N.: 1977, *Roots of caring, sharing, and helping; The development of prosocial behavior in children*. San Francisco, CA; Freeman.
- (マッセン, P. & アイゼンバーグ, N. 菊池章夫訳, 1980, 『思いやりの発達心理学』 金子書房。)
- Nakasato, Y. & Matstui, H.: 1993, *Altruistic Attitudes of Japanese Youths*. *International Journal of Psychology*, vol. 27, p. 562.
- Nakasato, Y. & Matstui, H.: 1996 *A Structure of Altruistic Attitudes -A Comparison of American, Chinese, Korean, Turkish and Japanese Youths-*. *International Journal of Psychology*, vol. 28.
- 中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井 洋・瀬尾直久: 1992, 『非行抑止要因の文化差に関する研究—日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として』, (財)日工組調査研究財団委託研究報告書。
- Staub Ervin.: 1978, *Positive Social Behavior and Morality, Volume 1*. Academic Press.
- Whiting, B. B. & Whiting, J. W. M.: (1975), *Children of six cultures: A psychocultural analysis*. Cambridge, MA; Harvard University Press.